

東野中遺跡

発掘調査概要報告書

平成 23 年（2011 年）7 月

大阪狭山市教育委員会

1. 調査に至る経過

大阪狭山市東野中 4 丁目の埋蔵文化財包蔵地外において、高齢者グループホームの新築工事が計画された。大阪狭山市では、開発事業主より試掘調査の依頼を受け、埋蔵文化財の確認調査を実施した。調査の結果、遺物包含層を 1 層と地山面において溝、ピットの遺構を検出し、さらに周辺地での踏査を行い、須恵器、土師器、瓦質土器等、古墳時代から中世にかけての遺物を数十点余り採取した。これらの調査で得た知見から、調査地を含む遺物等の分布範囲を埋蔵文化財包蔵地とすることが相当であると考え、文化財保護法 96 条の遺跡発見の手続きを経て、「古墳～中世の時代、集落跡、東野中遺跡」とするに至った。

その後、改めて文化財保護法 93 条による埋蔵文化財の発掘届が提出され、開発範囲内の約 35㎡を対象として発掘調査を実施した。発掘調査は平成 22 年 3 月 8 日から平成 22 年 3 月 15 日を調査期間とし、大阪狭山市教育委員会社会教育・スポーツ振興グループが調査を行った。



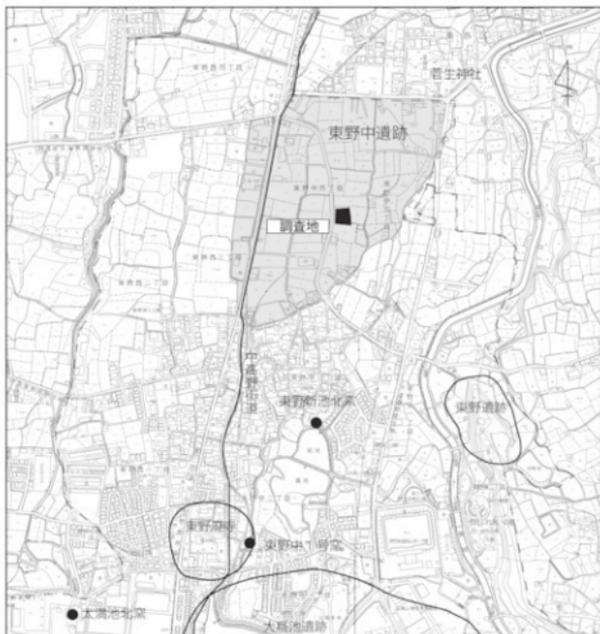
調査地近景

2. 遺跡の位置と歴史的環境

東野中遺跡は大阪狭山市の北東に位置し、市内の東野と呼ばれる地区に属する。東野は、西は狭山池主谷と呼ばれる旧天野川が形成した南北に延びる谷底平野と、東は蛇行しながら北流する東除川までの間の、東西両側から少し高まった比較的平坦な中位段丘面上にある。標高は55m～68mを測り、北へ向かって緩やかに高度を下げている。

東野という地名は、中世の大覚寺領荘園である野田庄に属した北野田、南野田、西野に対応する名称にちなんでいるという。集落は地区の南側に偏り、それ以外の帯には水路に導かれた耕地が広がる。現在は堺市に属し市域を越えてはいるが、地区の北東端には式内社菅生神社が鎮座し、集落は古来から菅生神社との関わりが深かったようである。

このような地域にある東野中遺跡の周辺には、飛鳥時代後半の創建と考えられる東野廃寺、中世集落跡とされる東野遺跡、須恵器窯跡である東野新池北窯、東野中1号窯があり、また遺跡の北辺には伊勢街道、西端には中高野街道が通っている。

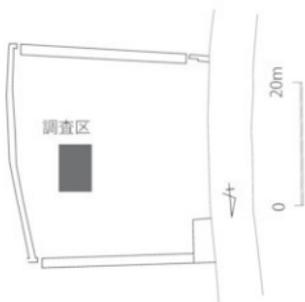


東野中遺跡周辺図 (1/10,000)

3. 発掘調査成果

(1) 基本層序

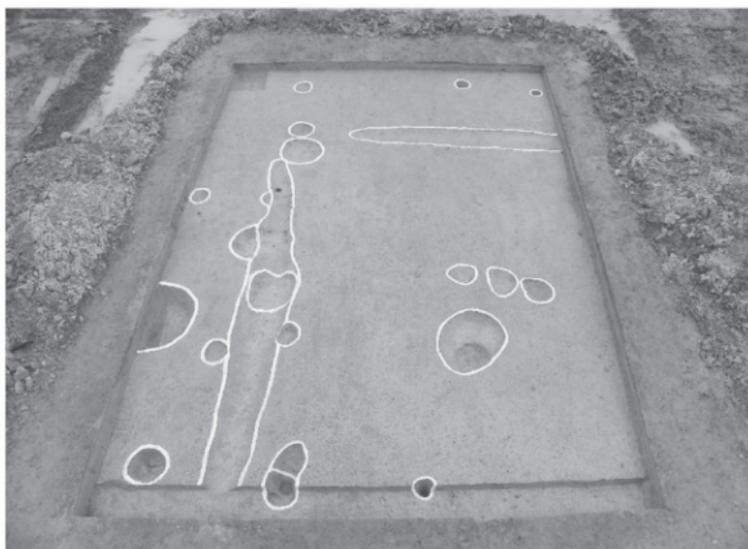
調査地は遺跡のほぼ中央付近にあたり、現況は田地である。調査区は全面耕作土に覆われており、これを第1層（土層断面図1）の現代耕土とする。調査の便宜上その一部を除去したため、層厚は5cm未満となっている。第2層（土層断面図2）は、灰色系のシルト～極細粒砂で層厚約10cmの整地土である。第3層（土層断面図3）は、黄色系のシルト～極細粒砂で、旧耕作土の床土である可能性が高く、層厚は約5cmである。第4層（土層断面図4・5）は、褐色系のシルト～極細粒砂で土師器、須恵器、瓦器等を含む古代から中世にかけての包含層と捉えられる。層厚は約10cmである。第4層の直下が地山となり、遺構はすべてこの面で検出された。



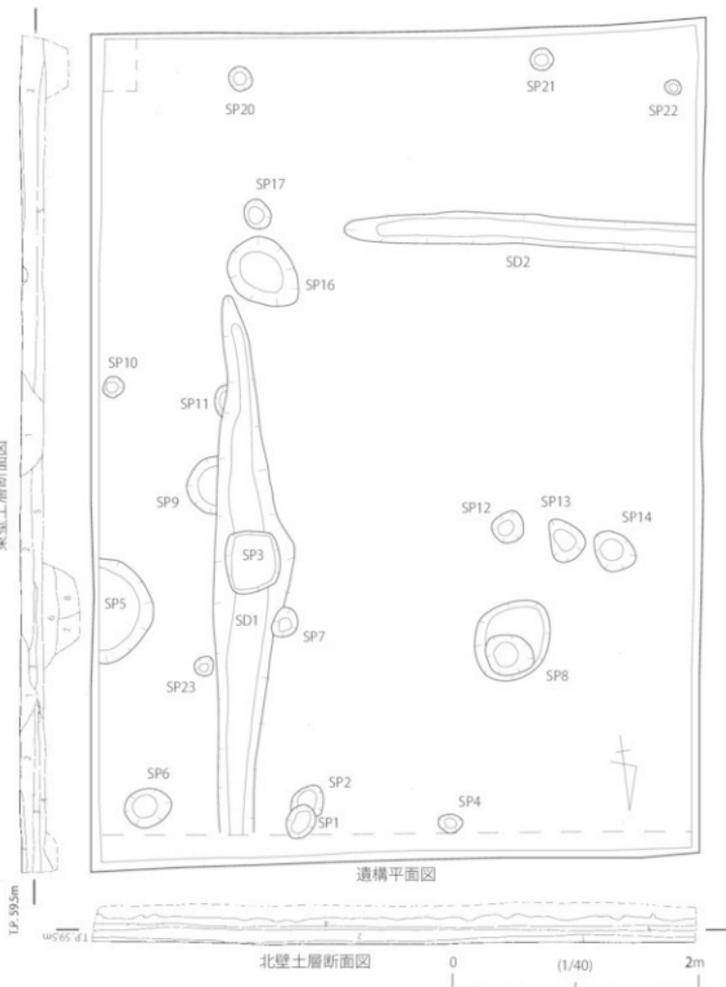
調査区位置 (1/800)



土層断面 (SPS・6周辺) 西から



調査区全景 北から



1. 現代粘土
2. 5Y6/1 灰色 (シルト～極細粒砂) に 5Y6/4 オリーブ黄色 (シルト～極細粒砂) が混入する。
3. 2.5Y5/6 黄褐色 (シルト～極細粒砂) に 2.5Y6/1 黄灰色 (シルト～極細粒砂) を含む。
4. 10YR6/1 褐灰色 (シルト～極細粒砂) に 2.5Y5/6 黄褐色 (シルト～極細粒砂) を含む。マンガ・土器片を含む。
5. 2.5Y6/1 黄灰色 (シルト～極細粒砂) に 2.5Y5/6 黄褐色 (シルト～極細粒砂) を含む。
6. 2.5Y6/6 明黄褐色 (シルト～極細粒砂) に 2.5Y5/2 暗灰黄色 (シルト～極細粒砂) を含む。しまり弱い。
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色 (シルト～極細粒砂) に 2.5Y6/6 明黄褐色 (シルト～極細粒砂) を含む。しまり弱い。
8. 2.5Y6/6 明黄褐色 (シルト～極細粒砂) に 2.5Y5/2 暗灰黄色 (シルト～極細粒砂) と 2.5Y4/2 暗灰黄色 (シルト～極細粒砂) が混入する。しまり弱い。



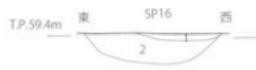
SD1・SP9

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 (シルト～極細粒砂) に 2.5Y6/2 灰黄色 (シルト～極細粒砂) が混じる
2. 10YR4/2 灰黄褐色 (シルト～極細粒砂)
3. 10YR4/2 灰黄褐色 (シルト～極細粒砂) に 2.5Y6/6 明黄褐色 (シルト～極細粒砂) が混じる



SD1・SP3

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 (シルト～極細粒砂) に 2.5Y6/2 灰黄色 (シルト～極細粒砂) が混じる
2. 10YR4/2 灰黄褐色 (シルト～極細粒砂)



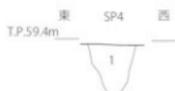
SP16

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 (シルト～極細粒砂)
2. 2.5Y6/4 にぶい黄色 (シルト～極細粒砂) に 2.5Y5/2 暗灰黄色 (シルト～極細粒砂) が混じる



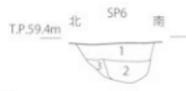
SP8

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 (シルト～極細粒砂) に 10YR4/3 にぶい黄褐色 (シルト～極細粒砂) が混じる
2. 2.5Y6/6 明黄褐色 (シルト～極細粒砂)
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色 (シルト～極細粒砂)
4. 2.5Y6/3 にぶい黄色 (シルト～極細粒砂) に 2.5Y6/6 明黄褐色 (シルト～極細粒砂) しまり弱が混じる



SP4

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 (シルト～極細粒砂)



SP6

1. 2.5Y5/3 黄褐色 (シルト～極細粒砂)
2. 10YR4/2 灰黄褐色 (シルト～極細粒砂) マンガン含む
3. 10YR4/2 灰黄褐色 (シルト～極細粒砂) に 2.5Y6/2 灰黄色 (シルト～極細粒砂) が混じる



SP17

1. 2.5Y5/3 黄褐色 (シルト～極細粒砂)
2. 2.5Y6/6 明黄褐色 (シルト～極細粒砂)



SP20

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 (シルト～極細粒砂)
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色 (シルト～極細粒砂) マンガン混じる



SP21

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 (シルト～極細粒砂)
2. 2.5Y6/4 にぶい黄色 (シルト～極細粒砂) に 2.5Y5/2 暗灰黄色 (シルト～極細粒砂) が混じる



遺構断面図 (1/20)

(2) 遺構

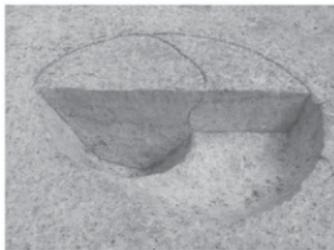
検出した遺構は、溝2条、ピット20基である。

溝 SD1は幅約20～65cm、深さ約15cmを測る。南北方向を軸とし、中央付近で幅が少し膨らむ。

SD2は東西方向を軸とし、幅は約25cmとほぼ一定で、深さは約5cmと浅い。両者ともに埋土は灰褐色シルト～極細粒砂を主とし、互いに交わりはしないが、埋土の状態や位置関係から一連のものとして捉えられ、区画的な役割がうかがえる。SD2からは黒色土器と思われる高台部片が出土している。

ピット ピットの規模は概ね2種類に分けられる。ひとつは、一辺あるいは直径が40cm以上のもの（SP3、5、8、9、16）で形状は方形に近いものがある。もう一方は、形状は円形から不定形で、直径が40cm未満のもの（SP1、2、4、6、7、10、11、12、13、14、17、20、21、22、23）である。これらには土師器の細片を含むものがある。

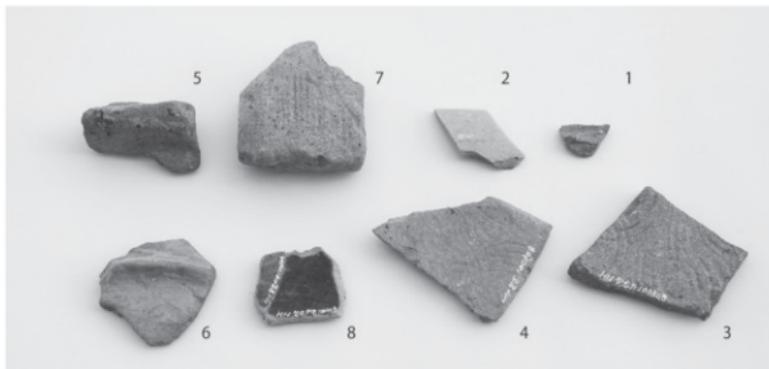
それぞれのピットの時期を特定することは困難ではあるが、その規模の大小は建物の時期の違いを示すのかもしれない。



SP8 埋土断面



SD1・SP3 埋土断面

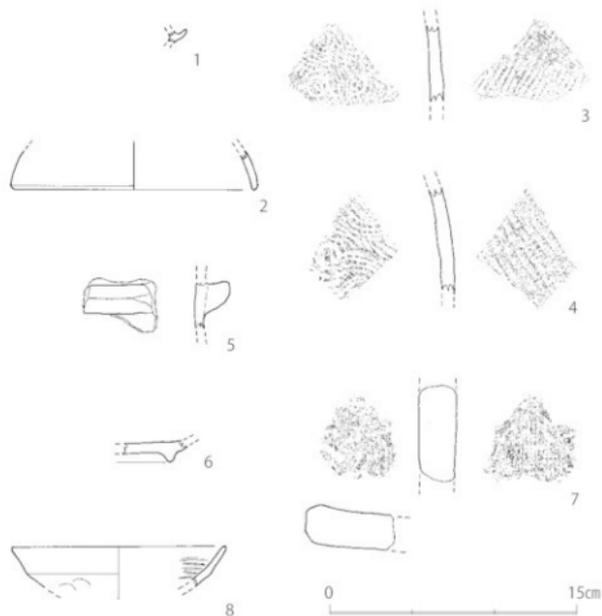


出土遺物写真

(3) 遺物

出土した遺物には、古墳時代から江戸時代にかけてのものが見られるが、その多くは須恵器、土師器の細片であり、コンテナに1箱分である。そのうち図示できた遺物は、包含層出土および表採によるものであった。

1～4は須恵器である。1は杯身の受部の破片であるが、細片のため復元は困難である。立ち上がり部は欠損するが受部は外上方に伸びる。2は杯蓋で復元口径14.5cmを測る。口縁部は外方に下り、調整は内外面とも回転ナデ調整である。3と4は甕の体部片である。ともに外面にタタキ痕、内面に同心円の当て具痕が残る。1～4はともに胎土は密、焼成は良好、色調は2は灰白色で、それ以外は灰色である。5は円筒埴輪の突帯部分である。外面には横方向のナデが見られる。胎土は密、焼成良好で橙褐色を呈する。6は土師器杯の底部片と思われる。胎土は密、焼成良好、淡赤褐色を呈する。7は平瓦で、凹面に布目痕、凸面に縄目痕が残る。胎土は密、焼成良好で橙褐色である。8は瓦器椀で、復元口径は12.8cm、内面に暗文を施し外面には指圧痕が残る。胎土は密、焼成良好で黒灰色を呈する。



出土遺物実測図 (1/3)

4. まとめ

これまで発掘調査の機会の少なかった市域北東部において、新たに東野中遺跡が発見され、発掘調査が実施されたことは意義深い。今回の調査で検出された遺構は、概ね古代から中世に属すると考えられ、出土した遺物は、古墳時代後半の時期、奈良時代後半から平安時代前半の時期、さらに南北朝の時期に見られるものである。残された遺構あるいは包含層からの出土遺物が示す時期幅の中で、人々の生活の痕跡がうかがえる。

今回の調査成果を地域の歴史的背景に照らしてみると、古代には菅生神社や東野廃寺があり、両者の創建に関わった人物が調査地近辺に集住していた可能性も考えられる。一方、南北朝期以降は、建物の痕跡がなくなり、14世紀頃以降には耕地跡しか見られなくなるのは、この地が荘園耕地として移り変わる様を現わしているのだろうか。今後の事例の増加を待ちたい。

報告書抄録

ふりがな	ひがしのなかいせきはつくつちょうさがいようほうこくしょ							
書名	東野中遺跡発掘調査概要報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	大阪狭山市文化財報告書							
シリーズ番号	39							
編著者名	土江 文子							
編集機関	大阪狭山市教育委員会							
所在地	〒 589-8501 大阪府大阪狭山市狹山1丁目 2384-1 TEL 072-366-0011							
発行年月日	2011年7月29日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしのなかいせき 東野中遺跡	おおさかみやまひがしのなか 大阪狭山市東野中	27231	—	34度31分 28秒	135度33分 34秒	2010.3.8～ 2010.3.15	35㎡	高齢者グループ ホーム建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
東野中遺跡	集落跡	古墳・奈良 平安・中世	ピット、溝	須恵器、土師器など		遺跡の新規発見		

本調査は、社会福祉法人マーマヤが計画した高齢者グループホーム建設に伴って実施し、調査にかかる費用は同法人が負担した。発掘調査は、大阪狭山市教育委員会事務局教育部社会教育・スポーツ振興グループの藤田徹也（当時）が担当し、本報告書の執筆・編集は同グループ、土江文子が行った。

編集・発行：大阪狭山市教育委員会

印刷：橋本印刷株式会社